

## 自己概念の経年的変化から見た対人恐怖傾向と自己愛傾向

筑波大学大学院（博）人間総合科学研究科 川崎 直樹

筑波大学心理学系 小玉 正博

Social phobia and narcissistic personality seen from the perspective of temporal transition in self-concept

Naoki Kawasaki and Masahiro Kodama (*Institute of Psychology, University of Tsukuba, Ibaraki 305-8572, Japan*)

The purpose of this study is to examine relations between temporal transitions in self-concept and narcissistic personality and social phobia. Undergraduates (N=267) completed a questionnaire consisting of a scale of narcissistic personality and social phobia and self-concept measures in terms of self competence and likability across the period from elementary school up to university. The results indicate that people with high social phobia scores tend to regard themselves as having been competent during their childhood period, but that the recognition of competence drops after adolescence. Such people were also found to lack confidence that they are liked by others after the period of childhood. In contrast, the results also suggest that people with high narcissistic personality scores tend to regard themselves as being highly competent and likable, but that the recognition of likability may be unstable.

**Key words:** social phobia, narcissism, temporal transition in self-concept

### 問題と目的

対人恐怖は、日本において頻繁に見られる心理的問題であるとされ（木村，1982；永井，1994），その形成過程や治療的対応については，伝統的に多くの議論がなされてきた（永井，1994；鍋田，1997）。近年においても，社会的ひきこもり（北西・久保田，1997；中村，1997；塩路，2000）など現代の問題との関連が指摘されるなど，依然として臨床・性格心理学の重要な研究主題の1つとなっている。

対人恐怖の生起・維持プロセスについては多くの見解が存在するが，それらの中でも共通して重要な役割を果たす要素として指摘されるのが，自己概念である（Clark，2001；Rapee & Heimberg，1997）。特に情報処理プロセスに注目した研究の中では，対人恐怖者は否定的な自己概念を有しており，それが対人場面において活性化され，そのために自己が他

者から否定的の評価を受けているという推測がなされ，不安や恐怖，羞恥感が喚起されると理解されている（Clark，2001；Rapee & Heimberg，1997）。こうした観点からは，否定的な自己概念が対人恐怖の背景因となっていると理解される。

しかし上記の指摘とは対照的に，本邦でしばしば取り上げられる対人恐怖と自己愛との関連についての議論などからは，対人恐怖者が非現実的に肯定的な自己概念を抱いているという指摘が頻繁になされている（北西，1998；三好，1970；鍋田，1997；岡野，1998；Tatara，1993）。三好（1970）が「うぬぼれ」ていながら完全にはうぬぼれきれていない」と呼び，鍋田（1997）が「半幻想的状态」と呼んだように，空想的・幻想的な意識の中で現実よりも肯定的な自己概念を作り上げ，それに固執・依存している状態から対人恐怖は起こるとされている。

こうした空想的で非現実的な自己概念は，幼少期

に過保護・過干渉な親から賞賛や保護を受けることによって形成されたものであるとされる(鍋田, 1997; 西園, 1970)。そうした自己概念は児童期まではそのまま維持され、その間は“黄金時代”(鍋田, 1997)と称されるように、自己が非常に肯定的なものとして体験されている。しかし青年期以降、現実検討力が増すに連れて、自己の未成熟な側面が意識されるようになり、非現実的に肯定的な自己概念は現実的な修正をせまられ破綻し、対人恐怖的な症状が前面に表れてくるとされる(三好, 1970; 鍋田, 1997; 西園, 1970)。

これらのことから、幼少期・児童期に肯定的な自己概念が形成され、それが青年期に至って破綻を示すようになる、という自己概念の経年的変化のプロセスが対人恐怖の形成に関わっていると考えられる。しかしながら、従来の対人恐怖と自己概念に関する実証的研究の多くは、対人恐怖者の自己概念が否定的であることを一義的に述べているものがほとんどである(岡田・永井, 1990; Hirsch, Clark, Mathews, & Williams, 2003; de Jong, 2002)。アイデンティティの未確立と対人恐怖心性との関連を示した研究(谷, 1997)や、自己—他者間での自己評価の乖離と評価懸念との関連を示した研究(山本, 1999)など、自己概念の不明確さや矛盾を示した研究は見られるものの、個人内での経年的な変化について直接扱った研究は未だに見られない。

そこで本研究では、対人恐怖の好発期である青年期(永井, 1994)にあたる大学生を対象とし、過去の自己概念を想起法によって測定することで、対人恐怖との関連について検討を加えることとする。個人の自己概念が経年的にどのような変化を示しているのかを数量的に捉え、対人恐怖的な特徴を持つ傾向(以下、対人恐怖傾向と呼ぶ)との関連について検討を行うことを本研究の第1の目的とする。

一方、対人恐怖との関連性・共通性が指摘されるパーソナリティとして、自己愛人格があげられる(岡野, 1998; 北西, 1998)。岡野(1998)は、過度に理想的な自己像と過度に否定的な自己像とが並存した自己概念を有していることが、対人恐怖傾向と自己愛傾向の共通した背景構造であることを指摘している。自己愛人格者が、こうした矛盾のある自己像を形成するようになる背景には、幼少期における冷淡で共感性に乏しい親による養育があるとされる(Kernberg, 1975, 1984)。そうした親の養育によって個人の中に空虚感や自己無価値感が生まれ、それを補償する防衛的もしくは未成熟な構造として誇大自己が形成・維持されると理解されるのである(Kernberg, 1975, 1984)。自己愛人格者の誇大な自

己概念は、積極的な自己顕示的・自己高揚の行動によって維持・確証がなされる(Kernberg, 1975, 1984; Morf & Rhodewalt, 2001)。そのため、対人恐怖者の自己概念が青年期で破綻を示しがちであるのに対し、自己愛人格者は社会的な有能さを示し、誇大な自己概念を維持していることが少なくないとされる(Kernberg, 1984)。

このように見ていくと、自己愛人格における誇大な自己概念も発達の経過の中で形成されていくものであり、経年的な変化を示しうるものであると考えられる。そのため、自己愛人格に特徴的な自己概念の変化のプロセスを対人恐怖と比較することで、両者の自己概念の特徴を明確に示すことができると考えられる。そこで本研究の第2の目的として、自己愛人格的な特徴を有する傾向(以下、自己愛傾向と呼ぶ)についても、自己概念の経年的変化との関連を検討することとする。それらの検討を踏まえ、自己愛傾向と対人恐怖傾向それぞれの特徴を比較し、両傾向の特徴について議論を加えることとする。

## 方 法

**調査対象** 国立大学の学生267名(男性83名、女性165名、不明19名)で、平均年齢は20.70歳( $SD = 0.96$ )であった。

**調査時期** 2005年1月中旬に行った。

**手続き** 講義時間後に質問紙調査を一斉実施した。

**調査内容** (1) 自己概念の経年的変化: 自己に対する全般的な評価を、年代ごとに想起して解答するよう求めた。年代の区切り方は、順に「小学1・2年」、「小学3・4年」、「小学5・6年」、「中学1年」、「中学2年」、「中学3年」、「高校1年」、「高校2年」、「高校3年」、「浪人期」、「大学1年」、「大学2年」、「大学3年」、「大学4年」、「それ以降」の全15年代とした。「浪人期」は該当期間がある者のみ回答を求め、大学期は該当する学年までを回答するよう求めた。なお、「それ以降」に回答のある被検者は大学生以外として分析からは除外された。自己概念の評定項目については、自尊感情の重要な2つの基盤と言われる「能力」と「好意」(Tafarodi & Swann, 2001)、「競争」と「親和」(Raskin, Novacek, & Hogan, 1991)、「優越性」と「社会的受容」(Leary, Cottrell, & Phillips, 2001)に対応するよう、「有能性」に関する項目(“自分は能力がある・優れている”という感覚がどのくらいありましたか?)と、「親和性」に関する項目(“自分は好かれている・受け入れられている”という感覚がどのくらいありましたか?)の2項目を設定した。年代ごと

に2項目に対して、“まったくなかった（1点）”から“とてもあった（7点）”の7件法で回答を求めた。

（2）対人恐怖傾向：対人恐怖的な傾向を測定する尺度として、堀井・小川（1996）の対人恐怖心性尺度を用いた。全30項目について、“全然あてはまらない（1点）”から“非常にあてはまる（7点）”の7件法で回答を求めた。分析には全体の合計得点を用いることとした。

（3）自己愛傾向：自己愛人格傾向を測定する尺度として、小塩（1998）の自己愛人格目録短縮版30項目から、原論文において各下位因子に負荷の高かった項目を5項目ずつ選択し、計15項目を用いた。“まったく当てはまらない（1点）”から“とてもよく当てはまる（5点）”の5件法で回答を求めた。分析には全体の合計点を用いることとした。

（4）自尊心：自己愛人格傾向に関する尺度を用いた研究では、自尊心を統制変数として用いることで、自己愛人格の特徴がより顕著に抽出されることが指摘されている（Rose, 2003; Sedikides, Ruduch, Gregg, Kumashiro, & Rusbult, 2004）。本研究では、こうした先行研究にならい、Rosenberg（1965）が作成し、山本・松井・山成（1982）が邦訳した自尊感情尺度を用いることとした。先行研究（佐久間・無藤, 2003）にならって項目8を除いた全9項目について、“あてはまらない（1点）”から“あてはまる（5点）”の5件法で回答を求めた。

## 結 果

**自己概念に関する指標の算出** まず個人の自己概念の全体的な肯定性を表す指標として、親和性項目、有能性項目に対する全年代の評定の平均値を算出した（以下、それぞれ有能性平均、親和性平均と呼ぶ）。

また、個人の自己概念が経年的にどの程度変動してきたかを表す指標として、全15年代の評価における個人内の標準偏差を算出した（以下、それぞれ有能性変動量、親和性変動量と呼ぶ）。次に、15年代を「小学校期」、「中学校期」、「高校期」、「大学期」の4期に分け、各時期での自己概念評定の平均値を算出した。なお、浪人期は高校期に含めた。これら各指標の平均値及び標準偏差はTable 1及びTable 2に示した。

**他の尺度の検討** 対人恐怖傾向、自己愛傾向、自尊心それぞれの尺度について、内的一貫性の検討のためCronbachの $\alpha$ 係数を算出した。その結果、対人恐怖心性尺度で $\alpha = .94$ 、自己愛傾向で $\alpha = .87$ 、自尊心で $\alpha = .85$ と、いずれも十分に高い内的一貫性を有することが確認された。対人恐怖傾向と自己愛傾向の平均値及び標準偏差についてはTable 1に示した。

**残差得点による自己愛傾向の指標化** 自己愛人格傾向の概念成分から自尊心で説明される成分を除外するため、自尊心を独立変数、自己愛人格傾向を従属変数とする単回帰分析を行い（ $\beta = .33, p < .01$ ）、回帰式に基づき残差得点を算出した。この残差得点と自己愛傾向尺度の単純合計得点との相関は $r = .95$ （ $p < .01$ ）、自尊心尺度との相関は $r = .00$ となった。この残差得点を以下「自己愛残差得点」と呼び、自己愛人格の特徴をより明確に反映した指標として分析に用いた。なお自己愛傾向尺度の単純合計得点については、以下「自己愛素点」と呼ぶこととした。

**自己概念の全体的特徴と対人恐怖傾向・自己愛傾向との関連** 対人恐怖傾向及び自己愛傾向と、有能性・親和性の平均及び変動量との相関係数を算出した（Table 1）。対人恐怖傾向においては、有能性平均、親和性平均ともに有意な負の関連が示され、さらにそれぞれの変動量との正の関連も示された。自

Table 1 自己概念の全体的特徴についての各指標の基礎統計量及び相関係数

	M	SD	相関係数					
			1	2	3	4	5	6
1 有能性平均	4.61	0.85	—					
2 有能性変動量	1.24	0.48	-.13*	—				
3 親和性平均	4.69	0.77	.43**	-.05	—			
4 親和性変動量	0.97	0.54	.00	.42**	-.18**	—		
5 対人恐怖傾向	105.92	29.42	-.30**	.16**	-.41**	.12*	—	
6 自己愛素点	45.45	9.38	.45**	-.01	.26**	.13*	-.40**	—
7 自己愛残差得点	0.00	1.00	.33**	.06	.14*	.17**	-.18**	.94**

注) 残差得点は標準化された値を用いた。

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

己愛傾向については、素点、残差得点いずれの分析でも有能性平均、親和性平均が有意な正の関連を示していたが、特に残差得点においては親和性平均との関連は弱くなっていた。また、親和性変動量との関連がわずかに見られた。

関連をより精緻に検討するため、有能性・親和性の平均及び変動量を独立変数とし、対人恐怖傾向、自己愛傾向をそれぞれ従属変数とした重回帰分析(強制投入法)を行った(Table 3)。その結果、対人恐怖傾向については親和性平均からの負の影響が最も強く見られていることに対し、有能性平均からの影響は弱くなっていた。また、有能性変動量からの影響は、高い値ではないものの相関分析と同様に有意であることが示された。自己愛傾向については、素点においても残差得点においても、有能性平均の影響が主に見られた。親和性平均からの影響は、素点においても残差得点においても有意ではなかった。また、親和性変動量の影響は相関分析同様

に有意であった。

**各時期の自己概念評定との関連** 次に各時期の自己概念評定と、対人恐怖傾向・自己愛傾向との相関係数を算出した(Table 2)。その結果、対人恐怖傾向は親和性と全体的に関連を示し、有能性に関しては現在から遠い時期ほど関連が弱くなっていた。自己愛傾向は、全体的に有能性との関連が見られ、親和性との関連は比較的弱かった。特に残差得点と親和性の関連は全ての年代で有意ではなかった。

**自己概念の経年的変化についての群別の検討** 対人恐怖傾向の高い者や自己愛傾向の高い者に、特徴的な自己概念の経年的変化のパターンが存在するかどうかを検討するため、被調査者を群分けした分散分析を行った。まず、対人恐怖傾向得点、自己愛残差得点の平均値+1SDの値をカット・オフ点として、それぞれ対人恐怖群・自己愛群を抽出した。その結果、対人恐怖群として31名、自己愛群として36名が抽出された<sup>1)</sup>。また、両得点が基準点に満たなかつ

Table 2 自己概念評定の時期別の基礎統計量及び各傾向との相関

	M	SD	相関係数		
			対人恐怖	自己愛素点	自己愛残差得点
有能性					
小学校期	4.85	1.44	-.07	.26**	.25**
中学校期	5.21	1.16	-.19**	.25**	.17**
高校期	4.45	1.28	-.29**	.29**	.18**
大学期	3.82	1.18	-.27**	.39**	.27**
親和性					
小学校期	4.54	1.13	-.18**	.15*	.10
中学校期	4.53	1.27	-.25**	.17**	.10
高校期	4.80	1.18	-.37**	.20**	.10
大学期	4.90	0.96	-.32**	.19**	.07

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

Table 3 有能性・親和性の指標による各傾向の重回帰分析

従属変数	独立変数				R <sup>2</sup>
	有能性		親和性		
	平均	変動量	平均	変動量	
対人恐怖傾向	-.14*	.12**	-.34**	.01	.20**
自己愛素点	.39**	-.02	.12	.16**	.23**
自己愛残差得点	.32**	.04	.03	.16*	.14**

\*\* $p < .01$ , \* $p < .05$

Table 4 各群における自己概念評定の時期別の平均値

従属変数	対人恐怖群 (N = 31)		自己愛群 (N = 36)		比較群 (N = 197)	
	M	SD	M	SD	M	SD
有能性						
小学校期	4.89	1.43	5.15	1.34	4.78	1.34
中学校期	5.13	1.05	5.44	1.20	5.19	1.20
高校期	3.66	1.42	4.79	1.36	4.51	1.36
大学期	3.21	1.22	4.49	1.30	3.81	1.30
親和性						
小学校期	4.13	1.00	4.81	1.19	4.52	1.11
中学校期	3.90	1.15	4.76	1.55	4.57	1.19
高校期	3.62	1.14	4.74	1.28	4.98	1.04
大学期	4.16	1.10	4.98	0.96	5.01	0.88

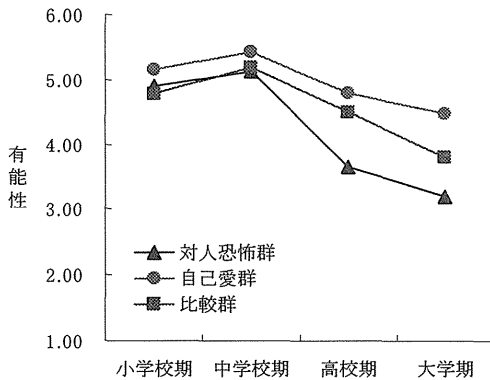


Fig. 1 各群における時期別の有能性平均の値

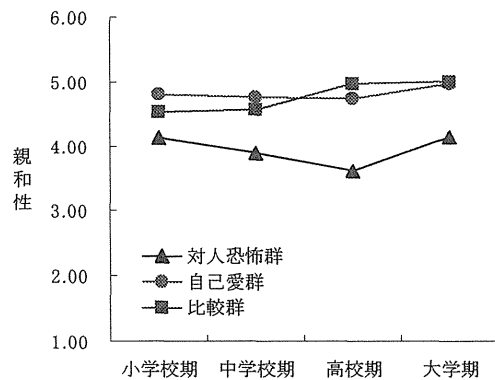


Fig. 2 各群における時期別の親和性平均の値

た被験者を、対人恐怖的でも自己愛的でもない比較群 (197名) として設定した。

以上の3群の設定に基づいて、各群(「対人恐怖群」・「自己愛群」・「比較群」)の3水準の被験者間要因と時期(「小学校期」から「大学期」までの4水準の被験者内要因)の2要因を独立変数とし、「有能性」と「親和性」に関する自己評価をそれぞれ従属

変数とした3×4の混合計画の分散分析を行った。各群及び時期における平均値などはTable 4, Fig. 1, Fig. 2に示した。

まず、有能性を従属変数とした分散分析の結果、群要因 ( $F(2, 261)=9.47, p<.01$ )、時期要因 ( $F(3, 783)=9.47, p<.01$ ) の主効果が有意であるとともに、交互作用も有意であった ( $F(6, 783)=3.32, p<.01$ )。単純主効果の検定の結果、高校期・大学期において群の単純主効果が見られた(それぞれ  $F(2, 261)=9.98, F(2, 261)=14.41$ , いずれも  $p<.01$ )。また、対人恐怖群、自己愛群、比較群それぞれにおける時期要因の単純主効果が全て有意であった(それぞれ  $F(3, 783)=32.72, F(3, 783)=6.39, F(3, 783)=12.85$ , いずれも  $p<.01$ )。水準ごとの多重比較の結果、対人恐怖群は、小学校期、中学校

- 1) その際、両得点ともに平均値+1SD以上の値を示した3名は分析からは除外した。この3名の対人恐怖傾向得点の標準化得点の平均は、1.07 (SD = 0.07)、自己愛残差得点の標準化得点の平均は1.47 (SD = 0.31)であった。自己愛残差得点の基準値は大きく超えるが、対人恐怖傾向得点についてはほぼ基準値に近い値であったため、「両傾向がともに高い群」を独立して設定はせず、上記2群のみを採用することとした。

期においては他の2群との差を示さなかったが、高校期以降に値が低下していた。高校期以降に値が低下する点は3群に共通した結果であったが、高校期・大学期における対人恐怖群の値は特に他の2群より有意に低い値であった。自己愛群は高校期では比較群と差が見られなかったが、大学期では値が低下せず、比較群とは差が見られた。大学期においては得点の低いほうから対人恐怖群、比較群、自己愛群の順で有意な差が見られた。

次に、親和性を従属変数とした分散分析の結果、群要因 ( $F(2, 261) = 21.04, p < .01$ )、時期要因 ( $F(3, 783) = 2.82, p < .05$ ) の主効果が有意であり、交互作用が有意傾向であった ( $F(6, 783) = 2.15, p < .10$ )。単純主効果の検定の結果、全時期において群の単純主効果が見られた (小学校期から順に  $F(2, 261) = 4.29, p < .05, F(2, 261) = 5.94, F(2, 261) = 20.41, F(2, 261) = 12.65, p < .01$ )。また、時期要因の単純主効果が対人恐怖群と比較群においてのみ有意であった (それぞれ  $F(3, 783) = 3.11, F(3, 783) = 3.40, p < .01$ )。水準ごとの多重比較から、対人恐怖群は小学校期においては自己愛群より値が低いのみで比較群との差は無かったが、中学校期以降は、対人恐怖群は他の2群より全て有意に低い値を示していた。また、対人恐怖群においては、中学期・高校期と経るにつれて値が有意に低下していたが、大学期には小学校期と差がないほどに値が上昇していた。一方、いずれの時期においても自己愛群と比較群の間には有意な差は見られなかった。比較群において中学校期から高校期を経るときに値の上昇が見られたことに対し、自己愛群においてはこうした時期による変化は有意ではなかった。

## 考 察

**自己概念の全体的特徴と対人恐怖傾向・自己愛傾向との関連について** まず対人恐怖傾向については、相関分析、重回帰分析いずれにおいても、親和性平均が有能性平均よりも全体的に強い負の関連を示していた。このことから、自己が他者から好意的に受け入れられているかどうかの認識が、対人恐怖の形成や維持に特に重要な要因となっていると考えられる。一方で有能性変動量との関連が、比較的低い値ではあったが、相関分析、重回帰分析いずれにおいても示されていた。このことから、自己の有能性が高く認識されている時期と低く認識されている時期とが並存しており、自己の有能性の認識に経年的な変動があったことが、対人恐怖傾向の高まりに関連することが示唆されていると考えられる。

自己愛傾向については、相関分析、重回帰分析ともに有能性平均との正の関連が主に見られた。親和性平均との関連が比較的弱かったことから、自己愛人格における誇大な自己概念は、主に有能性の高さを認識することによって支えられていると考えられる。一方で、親和性の変動量は相関分析・重回帰分析のいずれにおいても有意な関連が示された。比較的低い値ではあるものの、自己が他者から受け取られていると感じられていた時期とそうでなかった時期が混在している傾向が、自己愛傾向を高める可能性が示唆されていると考えられる。他者からの受容は、自尊心の重要な基盤である (Leary et al, 2001) とされており、自己がこれまでどの程度他者から受け入れられてきたかについての認識が不安定であるとすれば、自尊心の基盤も不安定である可能性が考えられる。自尊心脅威事態に対して感情的に反応しやすく、自尊心が変動しやすいなどの自己愛人格の脆弱性 (Morf & Rhodewalt, 2001) の背景には、他者から受け入れられているという認識の不確かさがあるという可能性も考えられよう。

**各時期の自己概念評定との関連について** 時期別に見た有能性、親和性との相関からは、まず対人恐怖傾向が親和性と全年代を通して負の関連を示すことが確認された。これは前述の解釈と一致し、他者に受容される存在として自己が認識されていない傾向が対人恐怖に関連していることが示唆されていると言えよう。有能性に関しては、現在に近い時期ほど高い関連が見られたことから、青年期以降にも自己を有能と思えるかどうか、対人恐怖傾向の高まりに重要な要因となることが示唆されたと言えよう。

自己愛傾向については、全体的に有能性との関連が顕著であった。親和性との関連は全体的に弱く、特に残差得点においては有意な関連は見られなかった。これも上記の解釈と一致しており、自己愛者が、人から受け入れられるのではなく、人より有能で優れていることを示すことで誇大な自己概念を維持しようとしている (Raskin et al., 1991; Morf & Rhodewalt, 2001) ことを示唆していると言えよう。

**自己概念の経年的変化についての群別の検討から** 分散分析の結果から、対人恐怖群の有能性に関する自己評定は、小学校・中学校期は他の群と同程度に肯定的なものであったが、高校期以降は、他の群よりも顕著に否定的なものとなっていたことが示された。小学校期・中学校期までは維持されていた有能な自己概念が、思春期の経過の中で著しく喪失されていると考えられる。一方で、他者からの受容に関する自己認識は、特に中学校期から顕著に低くなって

いた。理論的平均値の“4”の周辺の値を示していることから、拒絶されることを強く確信していたと言うよりは、自己が他者から受け入れられるかどうかには確信が持てない、という不安定な自己認識であったと考えられる。これらを考え合わせると、対人恐怖者は、思春期以前は、自己の有能性についてはある程度の肯定的な認識を有しており、全体的には肯定的な自己概念を維持できていると考えられる。しかし思春期以降、自己が他者から受け入れられているのかどうかの認識が不確かになると同時に、有能性の認識が著しく低下することで、肯定的な自己概念は失われ、不安や恐怖など対人恐怖的な体験をするに至ると解釈されよう。小学校期・中学校期の自己概念は、比較群と同程度に肯定的であったのみで、彼らが“非現実的”もしくは“誇大”と呼べる自己概念を有していたかは本研究の結果からは明らかではない。しかし少なくとも対人恐怖的な個人の自己概念は、時間軸上で見た場合に、肯定的に彩られた時期からそれが大きく失われる時期まで、大きな変動をたどってきたことが示されていると言えよう。

なお、一方で対人恐怖群に特徴的な結果として、親和性の値が高校期から大学期にかけて上昇していることがあげられる。これは、対人恐怖は年齢的な経過とともにその症状が消失していくという指摘(永井, 1994; 鍋田, 1997)とも関連すると考えられる。つまり、中学期から高校期において破綻した肯定的な自己概念が、他者との関係性を支えに再び肯定的なものへと再構築されつつあるとも考えられる。こうした対人恐怖の経年的な改善のプロセスや自己概念の再構築のプロセスについては、今後詳細な検討を加えるべき課題と言えよう。

自己愛群については、有能性の値において、他の群同様に高校期でやや低下を示しながらも、全体的には肯定的な値を維持していた。親和性については、他の群が時期に応じた変動を示しているのに対して、自己愛群にはそうした変動は見られなかった。この結果から、自己愛群は他の群に比べ、児童期の自己概念が思春期以降も肯定的なまま維持されていると言えよう。しかしながら、自己愛傾向は相関分析・重回帰分析において親和性変動量との関連を示している。分散分析の結果からは時期による変動性は示されなかったため、自己愛者における親和性の自己認識の不安定さは、発達段階に対応したパターンとして出現するものと言うよりは、個人特有の体験(例えば、友人や家族との葛藤など)によって出現するものと考えられる。発達のな変化だけでなく、状況による自己概念の変化などについて検

討することで、自己愛者の自己概念の詳細が明らかになると考えられる。

以上の検討から、対人恐怖傾向および自己愛傾向に特徴的な自己概念の経年的変化についていくつかの特徴が示された。特に双方に共通した特徴に注目するならば、相関分析及び重回帰分析で得られたような、時間軸上での自己概念の変動性ととの関連が挙げられる。岡野(1998)は自己愛人格と対人恐怖の共通要因として自己概念の不安定さを指摘しているが、本研究の結果からは、そうした不安定な自己概念は発達の経緯の中の自己概念の変動を反映しているとも考えられる。対人恐怖における非現実的・空想的な自己概念とは、有能だった過去の記憶に対する固執を表していると考えられる。また、自己愛人格における潜在的な自己無価値感、他者からの受容が失われた過去のある時点での体験に由来しているとも考えられる。このように、あるパーソナリティに特有の自己概念の形成・維持プロセスについて検討することで、そのパーソナリティについての明確かつ力動的な理解が得られると考えられる。

**本研究の限界と課題について** 最後に本研究の限界について述べる。まず第一点として、標本抽出の問題があげられる。本研究の被調査者は、国立大学の学生であった。そのため、多くの者は児童期から学業においてある程度の有能性を有していたと考えられる。またこれまでの進路選択に際しても、国立大学を志向する者特有の達成や挫折を経験してきたとも考えられる。そうした標本特有の特徴が今回の結果にも反映されていた可能性が考えられ、今後より一般性の高い標本を用いた検討が必要であると考えられる。

もう一点は、想起法という手法の限界である。大学生時点で想起した過去の自己概念は、何らかの情報選択や歪曲によって、当時のありのままの自己概念とは異なっていると考えられる。そういった意味では、過去の自己概念を測定する手法としての妥当性や信頼性には、改善の余地があると言えよう。しかしながら本研究で測定したものは、現時点の自己による意味づけや再解釈を含んだ「自己物語」(榎本, 2001)と言われるものとも考えられる。それまでの自己概念の維持や破綻の経緯を、現在の自己がどのように統合し物語として組み込むかが、現在の適応には重要であると指摘されている(榎本, 2001)。本研究は、自己概念の変化の経緯を端的に捉えたものであり、両性格傾向に特有の自己物語の大枠を示すものであったとも言える。今後は、こうした自己に対する意味づけや解釈など、より詳細な点について検討を加えることが課題であると言え

る。そうした検討を通して個人の自己の捉え方が詳細に示されることで、両パーソナリティを自己構築のプロセス (Mischel & Morf, 2003) としてより精緻に理解することが可能になると考えられる。

### 引用文献

- Clark, D.M. (2001). A cognitive perspective on social phobia. In Crozier, W.R. & Alden, L.E. (Eds.), *International Handbook of Social Anxiety. Concepts, research and interventions relating to the self and shyness*. New York: John Wiley & Sons Ltd. Pp.405-430.
- de Jong, P.J. (2002). Implicit self-esteem and social anxiety: differential self-favouring effects in high and low anxious individuals. *Behaviour Research and Therapy*, 40, 501-508.
- 榎本博明 (1998). 自己の心理学 - 自分探しへの誘い - サイエンス社
- Hirsch, C.R., Clark, D.M., Mathews, A. & Williams, R. (2003). Self-images play a causal role in social phobia. *Behaviour Research and Therapy*, 41, 909-921.
- 堀井俊章・小川捷之 (1996). 対人恐怖心性尺度の作成 上智大学心理学年報, 20, 55-65.
- Kernberg, O.F. (1975). *Borderline conditions and pathological narcissism*. London: Jason Aronson.
- Kernberg, O.F. (1984). *Severe personality disorders: Psychotherapeutic strategies*. London: Yale University Press.
- 木村 駿 (1982). 日本人の対人恐怖 勁草出版
- 北西憲二 (1998). 自己意識過剰—対人不安 ころの科学, 82, 37-41.
- 北西憲二・久保田幹子 (1998). 社会恐怖とひきこもり 最新精神医学, 3, 227-234.
- Leary, M.R. Cottrell, C.A. & Phillips, M. (2001). Deconfounding the effects of dominance and social acceptance on self-esteem. *Journal of Personality and Social Psychology*, 81, 898-909.
- Mischel, W. & Morf, C.C. (2003). The self as a psycho-social dynamic processing system: A meta-perspective on a century of the self in psychology. In Leary, M.R., & Tangney, J.P. (Eds.), *Handbook of Self and Identity*. New York: Guilford Press. Pp.15-43.
- 三好郁男 (1970). 対人恐怖症について—「うぬぼれ」の精神病理—精神医学, 12, 389-394.
- Morf, C.C. & Rhodewalt, F. (2001). Unraveling the paradoxes of narcissism: A dynamic self-regulatory processing model. *Psychological Inquiry*, 12, 177-196.
- 鍋田恭孝 (1997). 対人恐怖・醜形恐怖—「他者を恐れ・自らを嫌悪する病」の心理と病理—金剛出版
- 永井 徹 (1994). 対人恐怖の心理—対人関係の悩みの分析—サイエンス社
- 中村 敬 (1997). 対人恐怖とひきこもり 臨床精神医学, 26, 1169-1176
- 西園晶久 (1970). 対人恐怖の精神分析 精神医学 12, 375-381.
- 岡田 努・永井 徹 (1990). 青年期の自己評価と対人恐怖の心性との関連 心理学研究, 60, 386-389.
- 岡野憲一郎 (1998). 恥と自己愛の精神分析—対人恐怖から差別論まで—岩崎学術出版社
- 小塩真司 (1998). 自己愛傾向に関する一研究—性役割との関連—名古屋大学教育学部紀要 (心理学), 45, 45-53.
- Rapee, R.M. & Heimberg, R.G. (1997). A cognitive-behavioral model of anxiety in social phobia. *Behaviour Research and Therapy*, 35, 741-756.
- Raskin, F., Novacek, J. & Hogan, R. (1991). Narcissism, self-esteem, and defensive self-enhancement. *Journal of Personality*, 59, 19-38.
- Rose, P. (2002). The happy and unhappy faces of narcissism. *Personality and Individual Differences*, 33, 379-391.
- Rosenberg, M. (1965). *Society and the adolescent self-image*. Princeton University Press.
- 佐久間路子・無藤 隆 (2003). 大学生における関係的自己の可変性と自尊感情との関連 教育心理学研究, 51, 33-42.
- Sedikides, C., Ruduch, E.A., Gregg, A.P., Kumashiro, M. & Rusbult, C. (2004). Are narcissists Psychologically Healthy?: Self esteem Matters. *Journal of Personality and Social Psychology*, 87, 400-416.
- 塩路理恵子 (2000). ひきこもり (対人恐怖も含む) と森田療法 ころの科学, 89, 70-74.
- Tafarodi, R.W. & Swann, W.B. Jr. (2001). Two-dimensional self-esteem: theory and measurement. *Personality and Individual Differences*, 31, 653-673.
- 谷 冬彦 (1997). 青年期における自我同一性と対人恐怖心性 教育心理学研究, 45, 254-262.
- Tatara, M. (1993). Patterns of narcissism in Japan.



In Fiscalini, J. Grey, A. (Eds.), *Narcissism and Interpersonal Self*. New York: Columbia University Press. Pp. 223-237.

山本淳子 (2002). 中学生の評価懸念の高さと自己概念特徴との関連 筑波大学心理学研究,

24, 263-272.

山本真理子・松井 豊・山成由紀子 (1982). 認知された自己の諸側面の構造 教育心理学研究, 30, 64-68.

(受稿 3 月 22 日 : 受理 5 月 18 日)